

## 基調講演要旨

# 非文字資料から見る人類文化

川田 順造

- 1) 知覚=運動体としてのヒト
- 2) 知覚と運動の相互作用が生み出す文化
- 3) 人類文化における文字
- 4) 連続のなかの比較と断絶における比較

1) 知覚=運動体 sensorimotor organism としてのアメーバからヒトまでの生き物のうち、現生人類であるヒト (*Homo sapiens*) の先祖は、他の霊長類 *Primates* の仲間とともに、哺乳動物としては稀な樹上生活をし、それによって前肢でものをつかむ能力や、平面に並んだ両眼で近距離の対象を細かく識別する視力を具えた動物として進化した。アフリカのサバンナで、約 600 万年前に、チンパンジー属と別れ、樹から降りて直立二足歩行を始めたヒトは、ものをつかむことができる、自由になった両手と、声帯が下がり構音器官が多様化して可能になった、叫び声、啼き声とは異なる分節された声、すなわち言語をもつようになった。他の生物にはないこの二つの能力の複合が、地球上のさまざまな地域に拡散移住し、それぞれの自然条件に適応した人類の多様な文化を生んだ。

2) ヒトが生み出した文化、即ち、知覚と運動（反応）が相互に働いて作る表象は、知覚を構成する諸感覚のうち、身体内部の有機感覚 organic sensations など、生物としての本能と連続し、性交・分娩・排便といった生物としての生存にとって最も原初的な、だが文化によって異なる身体技法の原動力にはなるが直接に表象を生まないものを当面除くと、主に次のような感性の諸領域に見られる特徴を指標として、把握し、研究対象とすることができる。

**視覚表象** 基本色名。顔料 pigment の種類と製法。単色および複色色の象徴性、禁色、方位・季節と結びついた色。二次元／三次元／四次元表象。面（例えば西洋の油彩）／線（例えば東洋の墨絵）による表現。表意表句図像・表意文字／表音図像・表音文字。視覚印象を表す語彙。

**聴覚表象** 声音／器音、声音における産み字、melisma などの唱法、器音における打音／持続音、打／弾／擦／吹それぞれの重要性。リズム、二、三、四…拍、付加リズム／polyrhythm、持ち入り八ツ拍子（謡）。単音／多音（harmony、polyphony、tone cluster、など）。聴覚印象を表す語彙。

**味覚表象** 香辛料、油脂の素材と味。主食加工における粒／粉、乾／湿。ぬめりの有無。生／加熱。穀物酒（発芽、発酵、蒸溜）／果実酒発酵、蒸溜。味覚を表す語彙。

**嗅覚表象** 薫香／液香。聞香、香道。匂いを表す語彙。

**触覚表象** 全身の皮膚の触覚（さまざまな浴法）、皮膚の触覚を表す語彙。手・指先（点字、鍵盤機器ピアノ、タイプライター、ワープロなどのキーの操作）。

これら諸感覚のうち、視覚、聴覚、手の指先の触覚は、適応行動と創造行動を具現する大脳新皮質に結ばれており、分節的な認知能力があるので言語に対応し易い。味覚、嗅覚は、本能、情動を支配する、古い大脳辺縁系に直結しており、部分的にしか新皮質に行かない。そのために味覚、嗅覚は、分節的な視覚、

聴覚、触覚に対して、漠としているが強い、情動的な連想喚起力をもっている。

**身体表象** 舞踊における、描記的／律動的、one unit / polycentric、大地志向（反閃、shuffling）・上体前傾／天上志向・跳躍・直立。身体表象の語彙。

**共感覚** (synesthesia 異なる感覚領域の連合) 言語表現に投影された例、青二才、真っ赤な嘘、黄色い声、乙な味、渋い顔、甘い香り、等。ある匂いと記憶のなかの風景との連合（調香師 Michel Roundnitska の匂いのしるしづけ）、聴覚と視覚の連合表象（Alexandr Skryabin の色光鍵盤）、等。

総合された感覚としての、潔／不潔、浄／不浄の区別、反射的忌避感覚も、文化によって培われた、きわめて根の深いものである。自然環境と文化との、長い相互交渉の結果として形成される、街道筋や里などの景観、諸感覚・生業・衣食住などを媒介として、文化によって捉え返された自然である風土も、人類文化を研究する貴重な手がかりとなる。

感覚の面から分類した以上のような表象は、有形表象／無形表象などの形態による分け方で検討することもできる。有形表象、物質文化については、人類文化の研究にとって、それを形作る素材や技術が、自然条件と自然観・労働観との関係で問題になり、同時にそうした有形表象（家、社寺、記念碑、集落、共同の井戸や洗濯場・粉挽き場、伝承された道具など）が、ヒトの集合的な記憶の拠り所としてもつ意味が問われることになる。無形表象については、日常生活の身体技法（歩き方、座り方、眠り方、笑い方、泣き方、食事作法、挨拶の仕方など）、技術・儀礼の行為伝承、歌・語りの口頭伝承が、強い持続性をもって社会内で継承されており、人類文化の研究に重要な意味をもっている。

- 3) ヒトの文化全体から見れば、歴史的な古さにおいても、地域的・社会的なひろがりにおいても、いわゆる文字と文字文化は、きわめて限られた場を占めているに過ぎない。それにも関わらず、ヒトに特有の文字が人類文化で果たした役割、及ぼした影響はきわめて大きい。人類文化研究のための「非文字」資料などと、特別扱いされるゆえんである。

文字文化の基底にあるのは、強い二次元志向だ。紙、木簡、竹簡、粘土板、パピルス、羊皮紙、石碑面、岩壁面、等々、二次元という、一次元、三次元、四次元の事象よりも、固定および固定後の処理・操作が容易で、視覚によって詳細に識別しやすい次元での記号化への志向。大脳新皮質に多くつながる視覚、聴覚、指先の触覚のうちでも、弁別能力が大きい視覚への依存。一次元の音、声、言葉、ものの移り変わり（時間）を、二次元に固定し視覚化しようとする志向。西洋の五線譜に代表される楽譜は、主として音の高低、長短、強弱を表記し、音質表記を重視する日本の口唱歌と対照をなしている。声明、平曲、謡曲の節博士。日時計に始まる時計、カレンダー、年表などは、すべて時間の二次元表象化であり、レコード、磁気録音装置も、一次元の音の変化を二次元表象に固定して、反復参照、操作が可能にする行為だ。地図、設計図（平面図、立・断面図）も、サイズや次元の減縮によって、対象の認識や検討を容易にする。このような面で、文字を含む二次元表象は、文化のある面での精練、伝達、蓄積に、大きく貢献した。

ただ、四次元の身体表象である舞踊は、モーショキャプチャーなど、いくつかの特徴についてのグラフ化は可能でも、総合された形での二次元への転換は著しく困難だ。現在までその最も優れた方式とされている Labanotation も、細密で分析性が高いだけに、余程この方式に習熟した者でないと、記録することも、解読することもできない。音の記録が、楽譜の形で舞踊の身体動作と並行する形で組み込ま

れないという欠陥もある。構成要素として約束事の多い日本舞踊は、簡単な図示と文字化された言葉で、かなりの程度の二次元表記が可能だが、さまざまな舞踊譜が試みられてきたにもかかわらず、決定版はない。

南インドのバーラタ・ナーティヤムでは、二次元の記譜法はまったく存在せず、動作の一連に対応する固有の口唱歌があり、手で拍子を取りながら口唱歌だけで全曲の動きを歌う。つまり、四次元表象を一次元に減縮した記譜法といえる。創作舞踊においても、振付け師による「振り移し」という等身大の模倣が、現在でも最も適切な方法とされている。エクリチュール、文字に記すという、身体から外在化させた記号によって時間性を奪い、ある心象を固定する行為の対極にあるものが、時間のなかに全身を投入して心象を生きる律動的ダンスであるという川田仮説は、文字に書かれた聖典をもつ大宗教と、それと拮抗関係にある踊りの問題にまで展開するのだが、ここでは省く。

狭義の文字の起源を、アジアの東西に大別した場合、いずれも始源においては象形性から始まって、西では表音性と社会的機能では行政・契約へ特化し、東では漢字は表意性と社会的機能では甲骨文字におけるような卜占に始まって、表意性をとどめたまま、中国と日本では用いられつづけている。原初の象形性においても、西で最古のメソポタミアの楔形文字のもとになった絵文字ではきわめて即物的で、例えば男、女が、それぞれ性器の象形で表されているのに対し、漢字の「男」は「田」と<sup>すき</sup>禾の象形である「力」の組み合わせ、「女」は女性が跪いた姿の象形というように、社会的意味を強く帯びている。

さらに、注目すべきは、表音性に進んだ西の文字が、その到達点であるアルファベットのよう、閉鎖系を成す限られた数の構成要素によって、すべての言葉を表記できる書記体系を形作っているのに対して、表意性を保った東の漢字は、日本で作られた国字をはじめ、意味を担った部首の組み合わせによって追加可能な、開放系だということである。

ある範囲の対象を閉鎖系として捉え、単純な構成要素に分けた上で、その組み合わせとして対象を理解するという、原子論に代表される、アルファベットの書記法と通底する認識法は、西洋に発達し、いわゆる近代文明の基礎の一つとなったものである。これと併存して、非西洋世界に広く認められる、既知のものを比喩的に未知の対象にあてはめ、つまり「なぞらえ」「はかって」、新しい意味を対象に付与してゆくという、詩的言語の役割とも共通する認識法があると私は考えており、この二つの認識法が提起する問題は、アルファベット対漢字の文字論を超えた思考方法論とも関わっているが、ここでは問題の指摘にとどめる。

文字および文字文化の基本的な特質を、音声言語との対比で挙げれば、次の4点に要約される。①時間空間における遠隔伝達性、②同一メッセージの反復参照可能性、③個別参照可能性、④発信受信過程での中途休止の自由。

西アフリカの王制社会に王の系譜伝承を伝達・広報する手段として発達した「太鼓言葉」は、①②の性質を文字と共有し、しかし音声言語の分節的特徴 (segmental features) を消して韻律的特徴 (prosodic features) で意味の伝達を行う点で、私は裏返された文字、「マイナスのエクリチュール」と位置づけてきた。しかし、③④の特徴をもたない点で、文字が人類文化のある側面での洗練、蓄積に果たした役割は、太鼓言葉はもたないといえる。ただ、歴史認識の表象のあり方として、私が「文字」と「声」を対比させ、叙事詩 (声で過去を現在に甦らせる) と年代記 (文字で現在を過去に送り込む) という典型概念で論じてきた観点でいえば、太鼓言葉による歴史表象は、文字と声とは異なる第三の位置を占める。

このような視野で文字と声と太鼓言葉を論じる場合、私は従来慣用されてきた「かく」に代えて、「しるす」という動詞を用いたい。文字の始源となった粘土板に刻んだ楔形文字も、甲骨に刻んだ漢字も、「掻いた」のであり、ヨーロッパ諸語で「書く」を意味する多くの語のもとになった、ギリシャ語の *graphô* や、ラテン語の *scribere* の印欧語源も「掻く」という意味だ。それに対して「しるす」は「著く<sup>しる</sup>する」ことであり、声や器音を祖先の名を顕彰する、上記「叙事詩モデル」につながる行為として、「名」が「文字」と同義である由縁も裏書きする。

①の時間における遠隔伝達性を考える上で、とくに歴史意識との関係で、伝達の媒体は重要だ。太鼓言葉のような器音を打つ身体伝承や、歌・語りの口頭伝承、舞踊・儀礼などの身体伝承では、伝承の単位は人間の一生だが、二次元表象の文字では、紙から石まで、メッセージの記された材質の持続度に著しい変差がある。秦の始皇帝が己の偉業を刻ませた石碑文が、紙に書き写し継がれて後世に伝わったように、時間的な遠隔伝達性の大小は、メッセージの媒体そのものの持続度とは無関係だ。文字資料によって人類文化を探求しようとするときの、非文字資料との関係の多面性の一部も、そこに由来している。石の碑文の一回性に対して、書き継ぎ、語り継ぎなどの反復再生による継承は、伊勢神宮の式年遷宮に見られる形象メッセージの時間遠隔伝達性と同じ志向に支えられている。

- 4) 人類文化という規模で研究対象を設定するとき、そのさまざまな部分の比較研究が不可欠だ。文化の比較には、私見では、連続のなかの比較と断絶における比較とが必要であると思う。連続のなかの比較では、歴史的な相互関係をもつ文化の、影響、伝播、受容、非受容、変形、などが問題になる。他方、川田が提唱してきた「文化の三角測量」のように、日本、フランス、西アフリカ内陸社会、とくにモシ王国というような、19世紀後半まで相互に直接の重要な接触がなく、それぞれ異なる指向性をもってきたような文化の、いわば断絶における比較は、人間にとっての文化の意味を根底において問う、前者の「歴史的」に対して「論理的」とでもいうべき、隠れた意味の発見に資する (heuristic) 価値をもっている。

地測からの連想に基づく文化の三角測量には、ある文化を対象とするとき、参照点を二つとることで相互の対象化と同時に相対化を容易にするという考えと共に、三角点を増やしてゆくことによって、人類文化全体を覆うことを目指すという願望も籠められている。いうまでもなくそれは、さまざまな文化に属する、多くの研究者の協力によってのみ、可能になることだ。

#### 参考文献

川田順造『サバンナの音の世界』(カセットブック) 増補改訂版、白水社、1998 [1984]; 『アフリカの心とカタチ』岩崎美術社、1995; 『口頭伝承論』上下、平凡社ライブラリー、2001 [1992]; 『人類学的認識論のために』岩波書店、2004; 『コトバ・言葉・ことば』青土社、2004; 武満徹・川田順造『音・言葉・人間』岩波書店、1980; KAWADA, Junzo "Le portrait et le nom propre", in *Gradhiva*, Paris, Michel Place, 1997; *La Voix - Étude d'ethnolinguistique comparative*, Paris, E.H.E.S.S., 1998; *The Local and the Global in Technology*, Paris, UNESCO, 2000; "Epic and Chronicle - Voice and Writing in Historical Representations", in SOGNER (ed.) *Making Sense of Global History*, Oslo, Universitetsforlaget, 2001 (reprinted in J. KAWADA *Genèse et dynamique de la royauté*, Paris, L'Harmattan, 2002); J.KAWADA (éd.) *Cultures sonores d'Afrique I*, Tokyo, I.L.C.A.A.; J. KAWADA & K. TSUKADA (éds.) *Cultures sonores d'Afrique II* (2001), *III* (2004), Hiroshima City University; J.KAWADA "Human Dimensions in the Sound Universe", in R. ELLEN & K.FUKUI (eds.) *Redefining Nature: Ecology, Culture and Domestication*, Oxford, Berg, 1996.